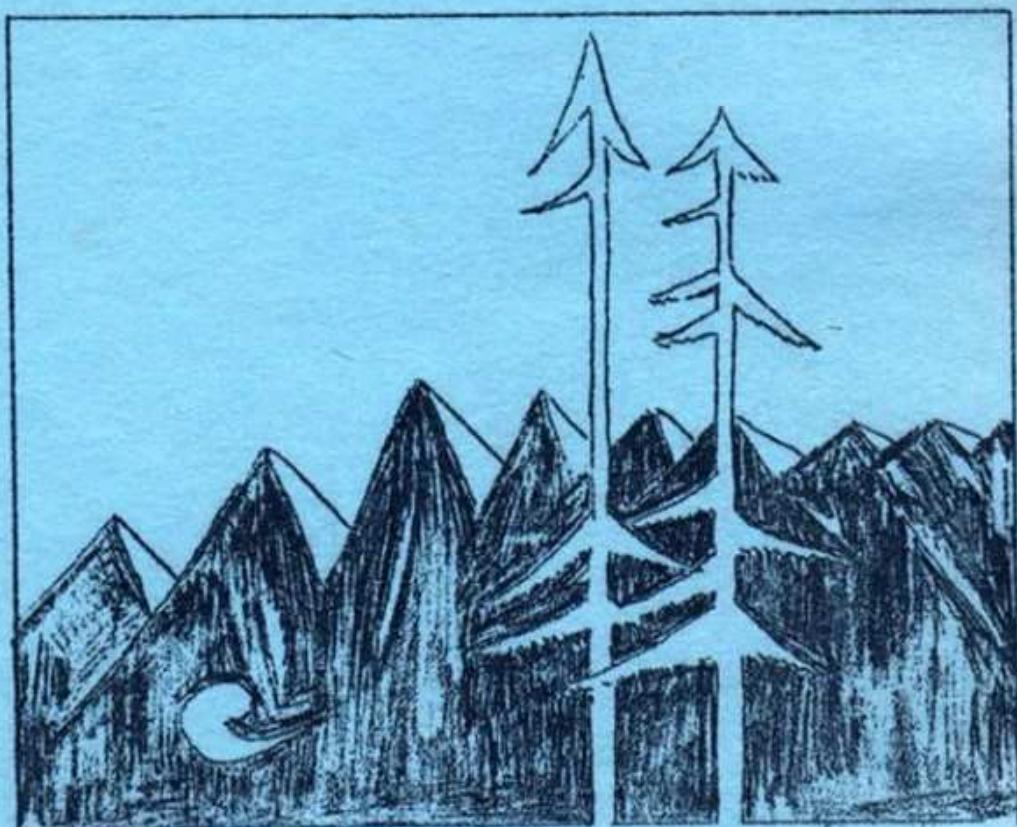


溪稜

NO 21



浦和 溪稜山岳会

溪 稜

第21号

人々は言うだろう、なぜそんな雪に覆われた高い山の中へ出かけ
て行つたのだ。そして夜中起きてザイルを体にまきうけそんな絶
壁をよじ登ろうとしたのだ……。中略……。
俺たちはそれをしなければならなかつたのだ……。中略……。
それが一文にもならないことだから、それが生命を賭け
るような危険を伴うは事だつたから、それが雪と岩と自分の意志
の聞いたつたから……。

——井上 靖作「冰壁」より——

もくじ

鹿島槍ヶ岳 春合宿

東尾根	吉田毅一	1
天狗尾根	中村博明	4
初めての合宿 (扇沢～鹿島槍ヶ岳)	渋谷光人	5
46年度新人歓迎山行 日和田山	須藤祐治	7
鹿島槍ヶ岳 東尾根冬合宿	吉田輝美	8
一年ぶりの岩登り (鳥帽子岩凹状ルート)	木田 清	10
登行	吉野 武	11
		11

南アルプス縦走 (北岳～茶臼岳)

矢嶋 實	12	
滝 谷		
クラック尾根	細井信幸	16
ドーム中央稜	中村博明	16
朝日岳～白馬鎧ヶ岳	永島祥光	17
ハガ岳卒業山行	渋谷光人	18
九月の前穂 (北壁からA壁)	吉田毅一	20

46年度会員山行一覧

会員住所録	庶務係	21
-------	-----	----

庶務係	27
-----	----

卷頭言

近頃の休日前夜の新宿駅は、山へ行く若い人たちの姿でいっぱいである。新しい靴、新しいズボン、新しい何々と新しいものすくめの人。すり切れたズボンによればよれのシャツ、手にこなまた傷だらけのヘルメットを持った人。ジー・パンにキヤラバンシューでナップサックをかついだ人。列車まちの行列の中でも一人静かにパイアタバコをくやうしている人。それそれ山に対する意識の違いであり、十人十色であるしかし列車はそんなことおかまいなしに満員ギューグュー詰めで乗客（登山者）を目的地の駅まで運んでいく山へ入れば長蛇の列、頂に立てばゴミの山、登った人は登頂記念？としてゴミを置いてくる。そんな都会の延長のようになってしまった山に、これでもかとこれでもかと押しかける。こんな登山者に山はいつも無言である。けれどもひとびとがすると、人間なんてのは頂のゴミと同じで何處かへ吹き飛ばされて一まるうのに、それでもなお押しかける。

整備された登山道をたどり、ハーフン、ホルトの運打された岩場を登り、登頂してゴミを置いてくるだけ何等建設的意識を持ち合せていない登山者が多くなつた、なくなるつたと言わればそれまでだが、人が登るから俺も登るんだという、ミーチャン、ハーフチャン的な考え方の山登りはやめてもらいたい。自分のイスムを持って山に接してもらいたい。

日本マルピニズムの聰明期における先人たちは、素晴らしい記録もさることながら素晴らしい文章を残している。いくら自分のイスムを持って山に登っても、文章で残して置くことができなかつたら忘れ去らせてしまう。文章で残せておければ、青春の一時期、山に憧れた自分がなつかしくも樂しく思い出せる時があるはずである。そんな時のためにも会報が存在しているのではないか。それを文才がないからダメだとか批判される珍らしいやどか、最初からあえみうめることなく、会報を会員全員のものとしていくよう全会員で努力していく、こうではないか。

会報を会員のものとすることによって、沈黙している会の雰囲気を一変するようにならうのだが……。

鹿

島

槍

ヶ

岳

昭和四十六年五月 後立山連峰の縦走 奥萬能槍ヶ岳
に合宿地を決定 時間を五月一日から五日までとし
東尾根 天狗尾根 そぞく新入訓練を目的として前沢
よりの移走と三箇所に分け ベトスキャンプを立山小屋
に上げた

東尾根

メンバ-

吉田 駿一

中田 有二

すみに朝酒を呑むのがでてみて
大変に驚いた。僕達は今日の行程は、
一の沢をアプローチするに一の沢の頭まで
えこ篠も天狗の岸までという事なので
あさる度量はないのであるが、何んと
も恐ろしい事である。

五月一日(晴)
天狗尾根に入ると陽と一緒にバスから下谷原に降り立つが、人いきれの中
から急に雪渓渡りの風に吹かれ、しかも
まだ陽も顔を出したばかりなので寒さが身にしみる。石を積んだり、トラン
シを立てたりして風を凌ぎ、早速朝食を取るが、僕の持参したギヨーザを入

盛山者か東尾根から一の沢に転落し
たというので、一の沢をソソデしてい
るのだ。そのおかげでヘリカルミン
のはしごの設置がトイッスロードがし
てある。雪の出て来るところまで苦
労せずに達することができた。雪深を
つめるが落石がひんびんとある。搜
索もしているので、途中から左の枝沢
へ入り枝沢の雪渓の切れた所から草付
のいやらしいトラバースをして左のも
のすごいヤア尾根に入る。下向きの滝
をかき分けかき分け高度をかせぐが
遅々として進まない。それでも頑張っ
ていると、フィックスロードが現れ
てきた。冬期にはこのヤア尾根も一つ
のバリエーションとして登られている
のである。このフィックスロードに
附まされて、るおも頑張るとようやく
このヤア尾根上にも雪のあるところが
出てきて、やがて雪の尾根に変ってさ
た、一カ尺の頭圍下二〇〇メートルと思わ
れる陽当たりのよい雪の斜面にバケツを
壠つて座食にする。伝樺の下から垂れ
る水を沸めて湯を沸す力で時間がかかる
が、こうすぐビブマーカーなので
三人ともサックの上に、デンと腰を落ち
つけて、よく晴れ渡った天望を楽しむ

この高度になつて天狗尾根敵とのトラ
ンシーバーの交信ができる。長い層休
み後、急に下ってきただ広い畠の斜面を
ラッセルすると、やつとのここで一の
次の頭に飛び出る。荒沢の奥空のフロ
ファイルと天狗尾根が一望である。

まだ時間は三時前であるが、ヒゲアーヴーの予定地なので時間をかけて半島洞を堀り、アタッカマ天とツェルトを張る。サツフその他の不釣りのものをツェルトに運び込むと、カマ天の中は三人でも楽々であった。ボリタンクに詰めてまたウイスキーをあおると、夜行の疲れが一度に出てきて、そのまましぶしの間寝入ってしまった。

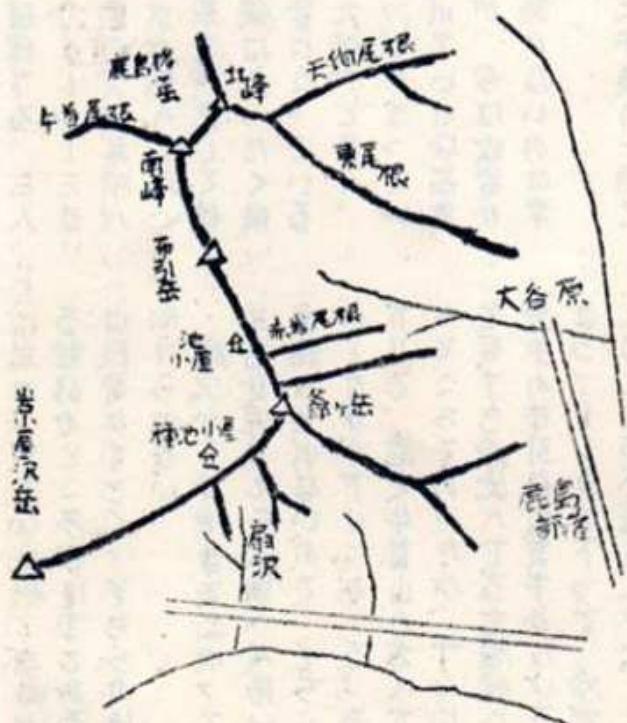
五月二日(晴のち吹雪)

屋が出ている。因は少々あるがいい。天気に恵まれそうである。昨日、明日は混みそうだから早く出発しようなどと云っていたが、結局出発できたのは八時近くになってしまった。それで毛急いで第工岩峰へ向うが、取材のリフジ上には、案の状二十人以上の人達が順序よく並んで時間待ちをやっているまるで南駿テラス並である。黙って待っていてもまらないので

なり急な雪の斜面であるが、スタンスが深く踏まれてゐるので無である。第二岩峰のコルへ着くが、ここにモタグのパーティが待つており風が出て、いかにも雪行キモ悪くなつてしまつたので、ツエルトを出してその中で少々早い昼食を取ることにした。コンロで沸かした紅茶を飲み、一瓶してベ

大声を出して歌うことにして。最後から行つてギヤギヤ騒ぐのは我々の得意とするところだが、あまり苦められたものではない。一時間半程待つて参り出すことになった。他のパーティはサイルを使用していたが、アンサインするのを面倒くさいのと、へほと思いつでもなく、そういうのでノーサイルという事にして發り出す。取扱が全室になつてしまつたが、迷板を廻つてやり廻ごして、あとは雪室をヒツケルのヒツクとアゼンで先行ペーティとゴボウ坂をしたるがら状調に登つて第一岩峰は終了する。

ンチレーターから外を見ると、朝方よ
かつた天候もくすれてガスが舞つてい
る、底雪の中の登攀かと思うとウンサ
リする。気がつくと、元氣返々勢いた
人達が数人しか見えない。いつの間に
登ってしまったのだろう。それでも、
我々も仕度しなくてはと外へ出ると、
取付の下に座つてあつた雪洞の中に
いるわ・いろわ・ざつと十人近くの人
が押し合いへし合いしていた。それで
はもう一版とツェルトの中へ潜り込ん
でしまつた。その間にトランシーバー
の交信時間が来たので交信すると、天



扇沢～鹿島槍ヶ岳概念図

狗尾根パトティは荒沢の頭にいることが確認されたので、そこで待つていてそらうこととした。

それから彼らも待たず、第二岩峰を登り出すことができた。それは、待ちきれないでコルから三の沢を下山するパートィがいた萬であるが、ここまできで戻るとはもったいない話だ。

第二岩峰は、風が強くなってきたのと、チムニー内のハンクで先行パートィが手こすっていたのでアンサインして登る。一ピック目は、ゴツゴツした岩稜を云々歩程登り、岩稜がフェイスになつたところから左へ五歩水平にトラバースしナムニーの中に入る。さらに雪の詰ったナムニーを三歩登りハング下のテラスまでである。別に問題となるところはないが、風があるので岩稜上では振られそうだ。二ピック目はテラスからすぐ上のハンクを越えるが、石チにガッカリしたホールドがあり、左足のアイゼンをきかして簡単に越せる。ハンクの上はスラブになっていて多少いやなところであるが、フィックスロープがあるので余だ。二十歩程で第二岩峰は終るが、確保しないようにと、雪のリッジをさらに二

歩程登りで遠松の根で確保する。三人集ったところで、アンサインしてまほ広い尾根状の雪の斜面を天狗尾根パティの待つている荒沢の頭へと急ぐ

荒沢の頭では熱い紅茶を用意して僕達を迎えてくれた。天候はまったく崩れてしまつて積もりの雪になつていて、休みはほどほどにして北峰へと急ぐ。北峰直下ではナイフエッジになつてゐるところがあつて、晴れていれば高度感を誇つところであるが、今は吹雪かれてるのでそんな余裕がないのは幸いである。

北峰へ着いたのは既に午後の一時を回っていた。十時頃には北峰へ着くのではないだろうかと思つていたが、トンネル下のテラスまでである。別に問題となるところはないが、風があるので岩稜上では振られそうだ。二ピック目はテラスからすぐ上のハンクを越えるが、石チにガッカリしたホールドがあり、左足のアイゼンをきかして簡単に越せる。ハンクの上はスラブになつていて多少いやなところであるが、フィックスロープがあるので余だ。二十歩程で第二岩峰は終るが、確保しないようにと、雪のリッジをさらに二歩程登りで遠松の根で確保する。三人集ったところで、アンサインしてまほ広い尾根状の雪の斜面を天狗尾根パティの待つている荒沢の頭へと急ぐ

に立つ。本来なら劍・立山がよく見える絶好のところのはずであるが、今日は風雪がすごく、そちらのほうへ顔を向けられない。

扇沢から冷池まで上がつてくる女性三名を渡じえた本隊へA隊」と今だに連絡かとれないでの、そちらの方を見にしながら下りにかかる。南峰からの下りで、危く牛首山の方へ下つてしまふところであつたが、すぐにおかしいと気付き冷池へ下る主稜線へとどる。途中の布引岳は見えずかないで過ぎてしまう。ドンドコ下つて、冷池小屋の見えるところへ着くと「ケーリヨリ」とコールがかかる。僕達モリケーリヨリとコールして、冷池の幕営地までかけ下る。

回復のきさしの出てきた空の下で、全員無事に冷池に集結できいた事を喜び合う。

記 吉田毅一



天狗尾根

メンバー 木田 清

中村 博明
保原 健二

五月一日

こうに落ちず、今朝のあの寒さはウソのようすに汗がほとばしってくるが、休むと体はヒンヤリとし、脱いたカツターシャツをすぐ着込むようになる。こんなことを何度も繰返すと、トランシーバーの交信時間の十一時二十五分になり、今朝別れた東尾根隊の元気な声が入って来た。

扇沢より入山の本隊と大町の駅前で別れ、午前七時頃大谷原に到着、睡眠不足にバスの暖房が抬車をかけ、たるんでいた既の皮も一步バスを降りると寒気にてられパッとてしまう。黒い地肌と白い残雪とでまだらになつてゐる稜線を眺めながら、吉田さんの奥さん手づくりの餃子を「ちそく」にあり饅頭を養って、天狗尾根と東尾根にわかれて出発する（午前八時）。

一時間程歩くと取水口を過ぎ荒沢の出合に着いた。小休止をし、荒沢乙二十分程つめると天狗尾根の取付であるこの支校から尾根へ出る五十分程の登りは、急である上に、重い荷、それにましまして身体の調子の出ない僕には工ラフニたえた登りだつた。

尾根上へ出てはらく歩くようになつたところで少し動くことができなかつた。残雪を踏むようになる。傾斜はい

五月二日

これより上、尾根は痩せ、両側は切れおち体力的疲労に精神的なものが加つて歩き慎重となる。またその反面何とも形容のできないほらしい気持ちになってくる。痩せた尾根上でもところどころ広くなるつているところがあつて第二クロアールチ前に先行パーティの作った雪洞を見つけ、ビバークサイトとすることにする。二時五十分であった。

交信を終り、ゆるやかになつた尾根を登っていくと、左前方の木々の間より荒沢の奥壁が見えてくる。一時間も右に遠見尾根、左に東尾根から荒沢奥壁と見ながら登ると、天幕が張れそうなく広く傾斜のゆるくなつたところで小休止へ東尾根の二〇〇三・九ボピーク休止へ東尾根の二〇〇三・九ボピークがよく見える）。小休止後、さうに歩を進め、第一クロアールチ前の大きな岩（軍艦岩？）の荒沢側で昼食、昼食をとりながら一時二十五分の交信時間に入り、東尾根隊との交信をする。東尾根隊は、まだ尾根上には出でていなかつたこと。

昼食後、第一クロアールの突破はナダレを警戒の心的負担と、早足のオーバーヒートで、クロアールを終了したところで少し動くことができなかつた。鼻から一度下つて鹿島槍北壁への

トラバースセミになつてゐるコルを経て、北壁と奥壁との筋合になつてゐる急な稜を登り、奥壁九稜の終了点である小合岩に十時前到着。

岩峰取付点で途中抜いた女性パーティに声をかけられ、この岩峰で八時頃アクシデントのあったことを知らされ、この女性パーティ（凌雪会）の一名が取付でスリップをしてカクネ里へ転落行方不明のこと。リーダーと他会の人が四十米二本を結び八十米にして下降してみたが発見できず、我々の行動予定を変更することはできぬ旨当事者に説明し、アンサインして岩峰を登る。十一時二十分荒沢の頭に到着。（転落者については、下山後張感は昨晩のメサシの煙を何處かえ吹き飛ばしてしまった様だ。すぶ濡れの体からは確實に体温が奪われていくのが判る。自分の吐く白い息が雨の中に消えていく、そんな事に注意が向けられる。長く雨に当たっているからだろうか、頭がボーッとして、ただ無意識に足を進めている。昨日までの天気がウソのようである。とう、私達の入山したのが三日前であった。……）

東尾根筋はオニ岩峰直下、順番待ちである。交信で先程の女性パーティのリーダーが、南壁を登つてゐるから発見したい連絡をしてくれ等々のやりとりをして「終了」のコールサインを送つたにもかかわらず、「ケイリヨー」のコールを出し、トランシーバーを出すように大声を出す。オニ岩峰で順番待ちをしていた他のパーティは笑つてい

たそうである。

十二時四十分 ツェルトを被つて強風を避けていた我々のすぐ近くで「ケイリヨー」のコールあり、すぐ紅茶を御馳走して出発、最後の急な稜線を十五分程登つて、

一時五分待望の鹿島槍ヶ岳北峰頂上を踏む、風が強く頂上でゆっくりすることができず、疲れた身体にムチうち角峰の急な上りを登つて、頂を経て今池のベースキャンプへ三時過ぎに到着した。
記 中村博晴

初めで合宿

渋谷光人

リ注ぐ陽の光口、長く重苦しい冬の庄活からいっぺんに抜け出したかの様である。ヒンヤリとした空気は眠気不足の頭に快い刺激を与えてくれた。軽く朝食を済ませた私達は、扇沢駅を後にし、バス通路を戻り新道に向つた。途中、計画を変更して扇沢を詰めることになり、沢筋のゴーロを進んだ重い荷物を背負つてのゴーロは大変歩きにくい。雪渓の下端で少し休んだ後で、一気に尾根の取り付キ真まで進んだ。ショイコが肩ヨで喰い込み、少々バテ気味であった。大休止をしたのでバテてはいけないと想い、胃袋に食物

を詰め込んだ。おにぎりを食べようと
したが、パサパサでノドを通らない。
取り付いて急登になつてからは、ペ
ースが落ちたので呼吸も落ち着いたが
前の人遅れるいようにするのか精一
杯でだつた。ただステップの通りに足
を交互に進ませるだけの单调さ、後ろ
をふり返りそして前を見上げては、落
胆の中にあるいは噴氣の中に自分を見
つけるのだった。

腹が減つて少々バテ気味の頃、トッ
フが「昼にしよう」と言つた。さっさ
からまだかまだかと思ひながら、やっ
とついてきたのだ

少し遅い昼食がすんで、しばらく行
くと傾斜が緩るやけになり、稜線も真
近と思われたが、自然是その淡い期待
と落胆の波の中に私を置き去つた。
少々休みすぎたせいもあるのか、少
しバテて来た。転倒、這いつくはり
ながらも稜線に出たのが四時頃であつ
た。稜線は風が強く雪はクラストして
いて、その間かう疊や這い松が頬をの
そかせていた。しばらく行つた所で小
休止をした。もう足はふらふらであつ
た。チーフが「まだ歩けるか」と聞い
たので、私は「ハイ」と答えたが、結

局へで幕宮することになった。

日が暮れるに従つて風が強くなり、
稜線ではテントが飛ばされそうで張れ
そつもないのに、風下に少し下つた所
に雪を切りくすしてテントを張つた。
なんやかやしていろいろうちに夕食もで
れ、量は少なかつたがおいしく食べら
れた。先輩の靴の雪を落してから寝袋
の中に入つたがなかなか寝つかれない

の音かなと思つて笑いをこらえていた
が、テントの外に出て見て驚いた。そ
の音の主は雪鳥だった。白とこげ茶の
少しうつた雪鳥がテントの回りをうろ
ついている。そばに近づこうとすると
パタパタと音を立てて走のいてしまう
ステップに火をつけ、食事の仕度を
しているが、まだ先輩は奥の方で寝て
いる。そんな事が良い張り合いになる
のだからおかしなものだ。

出発してから五分もしないうちに空
腹で力が入らなくなつた。爺岳に向う
稜線は風が強く雪が舞つて視界があま
りよくなかった。爺岳をトラバースし
て冷池が近くに見えてきた頃にはもう
完全にバテてしまつた。何回もころん
でいるうちに、今度は早くへろはない
かなあと思うようになる。千鳥足ながら
も乗越しをすき急登すると、目の前
に小星の赤い尾根が現れて来た。や
つとベース予定地に着いたのだ。小屋
のウレチ前で荷を降し、暖い食事をし
た。もう歩かなくていいと思うと、ホ
ックとして急に疲れが出てきた。ショイ
コのせいで腹筋がカチカチになつてしま
った。テントワイトを整備し、フロツ



自分で自身よくここまで来たなあと頭の
中で今までの事が走馬燈の様に駆け回
る。

うとうとしているうちに夜明の陽が
テントを通して感じられる。一日がす
ぎたと思うと、何か心の中に湧き上る
感覚の様な物が感じられた。まだ完全
には目覚めていない私の頭の中に、ク
グ、という音が聞こえる。だれかの腹

クを積み上りた頃、B隊とC隊の人達が到着した。

ようやく暮れて来た空に、鹿島槍と剣がとてもロマンチックだ。夜は冬天組と夏天組に分かれ、トランシーバーで雑談を交わした。

朝、起きると昨日にも増して鹿島槍が素晴らしい。みんなで体操をしてから鹿島槍へ向った。荷が軽いのでとても快調である。布引岳のあたりで雪鳥を見つけた。風が少し強かったが快晴である。後ろを振り返ると冷池のベースが、剣が、槍穂が見える。頂上はあまり広くなかった。中国がすぐそこに見えそうだ。風を避けてベースの方に向いて寝つこうがつた。とてもヨブーいサンオイルを塗ったのでコンガリやけのことだろう。それにしても頂上から眺めは素晴らしい。来て良かったなあ……

はるか下の水の流れる音に終りも近いことを知った私の心は生氣を取り戻したようだ。ヅグザクの雪の岩礫の混った急な道をかけおりると、目の前に大沢の雪渓が広がつた。

46年度 新人登山行

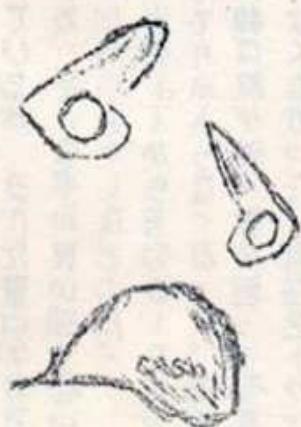
奥武蔵　曰　和田山

男岩・女岩

須藤　拓治

ある。岩登りは初めてなのでかなり緊張する。でも先輩がやっているのだから俺にだつてと思って頑張る。確保されている所なんとか登つた。こんどは懸垂である。めりと思ったように面白いものだと思った。俺も早く先輩みたいにフリーで登りたい。昼からは男岩に行って登降をくり返し、最後には全員で写真を撮る。

アツという間に、ミコトウが終ってしまった。さつときょう一日のことは、いつになつても忘れる事ないのでささいに一日になるだろう。



期日　46年4月18日　天気　晴

参加者

吉田	山県	石川	吉野	矢嶋
細井	木田	榎木	中村	
藤井	奇藤	南	黒田	育
松本	須藤			

鹿島槍ヶ岳東尾根合宿

期間 昭和四十六年十二月二十日(木) 昭和四十七年一月三日(日)

参加者

吉野 SL 吉田キ 木田
中田 石川 矢嶋 中村 吉田テ 渋谷 須藤

山雪混じりの強風がテントをたたく音と、内張りに張りついた氷がしめすよう耐えがたい寒気で目をさましてしまい、いつの講習会だったか僕のとなりに座った奴で「冬山なんて日常の生活の中で耐寒訓練をしておけば全然寒さなんて感じないですね」と、いかにも山のベテランでありますんていふような面構えで得意げそうに話していった奴の顔を思い出てしまった。

冬山はやっぱり寒いもんだよ腹立たしくなってきたが、ホエーフスに火を付ける。午前三時、ここは二〇〇三メートルの一の沢の頭、ベイスキャンプとしては、鹿島槍をアタックするのには最適の地と言える。昨日、鹿島部落を経て大谷原よりここ

の次の頭までの行程には、夜行列車の疲れと四十kgの重荷に喘いで這って歩くという形容がピッタリすぎる程バテ切ってしまった。

装備点検を済ませ、ウインドヤッケ・オーバースポン・オーバーシューズで身を固めて外に飛び出す。冽風の中雪の流れが非常に速い。鹿島槍の双耳峰はその雄姿を雲の中にかくして、二の沢の頭・オーラ峰まできり望めない。アイゼンと着ける間にも風は容赦なく体温を奪ってゆく。(ここより(一の沢の頭)鹿島槍の頂までは、二の沢の頭・オーラ峰・カニ岩峰、荒沢の頭を経て急峻な雪壁あるいは岩稜となつて続いている。

午前六時、まだ夜の明けきらぬ

ベースキャンプを後に、ヘッドランプの明りをたよりに出発する。アイゼンとセイケルの世界に憑かれた四人には極寒の冬山の中にしてこそそれが嘘のような、春の野山を歩きまわっているよう軽い足とりで徐々にピッチは上っていく。アイゼンの雪と噛む金属音だけを残して……

一の沢の頭より二の沢の頭までは、

氏名	29日	30日	31日	1日	2日	3日
吉野	B-C 一の沢の頭		↑ 北峰		下山	帰浦
吉田キ	ク		ク		ク	ク
木田	ク	B-C 峰 下壁		B-C 北峰	ク	ク
中田		B-C 一の沢の頭		ク	ク	ク
石川	B-C 一の沢の頭				ク	ク
矢嶋	ク			B-C 北峰	ク	ク
中村	ク	↑ 北峰	B-C 北峰		ク	ク
吉田テ	ク	ク	ク		ク	ク
渋谷	ク	B-C 峰 下壁		B-C 北峰	ク	ク
須藤		B-C 一の沢の頭		ク	ク	ク

さしたる登り下りもなく小さなコマの連続で着いてしまった。いつの間にか低くたれこめていた雲も青空をえ見えるようになり、これからのお天を約束してくれるような空模様になってしまった。仰ぎ見れば鹿島槍の稜線には雪煙が舞い上がっている。定期交信も終り二の次の頭を後にする。オ一岩峰までは今までとは打って変わって急峻な雪壁となる。でやくてをさえきっている。サイルを組む必要もないけれども、昨夜からこの風で雪面がクラストしているのでスリップしないよう細じれ注意を持って行動する。

真後ろから朝の太陽を受けてそれが雪面で反射し、ゴーツルを付けていないとなる頃、寒気の為にかたくなつていてなる頃、寒気の為にかたくなつていてきた。昨日まで入山して二日間、小雪が降っていたが、今日は嘘のよう上天氣つづいている。「ついで一本立てることにする。

タバコを吸いながら一トを追つて見るとあまり岩場はなく岩と雪のミツフースーた崖が三十メートルより石にトラバース十メートルでそのままで頭に出る。先行パーティはラッセルで大分苦労しているようである。三十分待たれてようやく行動開始。オ一岩峰はなんなく越える。それよりオニ岩峰までは変哲もない雪段を三十分、ここで又待たされる。石則は荒沢までスッパリと切れ落ち、荒沢の奥壁が手に取るようになれる。荒沢とはさんで天狗の鼻を登つていの途中も、赤・黄・青のマッケとよく見える。初めは岩稜を二十メートル登り五メートル左にトラバース・

鹿島槍の山頂まではホカホカ陽気になってしまい、春山の稜線歩きのようになってしまった。北峰に着いたのが十一時十五分、流石に風が強い、今日まで見られなかつた、立山、剣ヶ意外な近さで視界の中に飛び込んでくる。冬一く憧れていた嚴冬の鹿島槍の頂にて忘れかけていた初めての冬山の谷川岳を思い出す。丁度今日と同じ日、三十九年十二月三十一日に天神峰のベースを後にて快晴の谷川岳を目指し、当時まだ冬山経験のなかつた僕には、見るものすべてが驚きであり又、新鮮であった。トレースされていない凍雪の中を行く状況は、腰までのラッセルに泣きたい程苦しかつた天神尾根、雪の中粉末ジュースを混せて作つたジャイゼンのシマッケがようやくひつかかり、ハンマーたる力を抜きながら、仲間にして微妙なバランスで強引に乗り越す。オーバーハンクと言えば岩登りをやり始めた頃、伊豆の城山の三日月ハング直上ルートで人工登攀の練習中アブミを使ってハンマーを越えるのが恐くて恐くて仕方がなかつた事を思い出す。

鹿島槍の山頂まではホカホカ陽気になつてしまい、春山の稜線歩きのようになつてしまつた。北峰に着いたのが十一時十五分、流石に風が強い、今日まで見られなかつた、立山、剣ヶ意外な近さで視界の中に飛び込んでくる。冬一く憧れていた厳冬の鹿島槍の頂にて忘れかけていた初めての冬山の谷川岳を思い出す。丁度今日と同じ日、三十九年十二月三十一日に天神峰のベースを後にて快晴の谷川岳を目指し、当時まだ冬山経験のなかつた僕には、見るものすべてが驚きであり又、新鮮であつた。トレースされていない凍雪の中を行く状況は、腰までのラッセルに泣きたい程苦しかつた天神尾根、雪の中粉末ジュースを混せて作つたジャイゼンのシマッケがようやくひつかかり、ハンマーたる力を抜きながら、仲間にして微妙なバランスで強引に乗り越す。オーバーハンクと言えば岩登りをやり始めた頃、伊豆の城山の三日月ハング直上ルートで人工登攀の練習中アブミを使ってハンマーを越えるのが恐くて恐くて仕方がなかつた事を思い出す。

一年ぶりの岩登り

谷川岳エボツ岩登り状ルート

木田 清

この前の岩登りは一体いつのことだつた？ けな？ 一寸山行日誌でも縫解かねば思い出せない程、余りにも岩登り（山）から遠ざかってしまった。自分自身をも、どうしてこう山へ行かなくなってしまったかな？ と、今までを振り返ってみた。しかし、これと言つた理由はなく、なんとなく山へ行く気持になれるか？ と、それでいて寂に居ても何もしないでただ漠然と過ごす毎日だった。こんなことでは二度と「ない」の青春があまりにちがつたない様な気がして思い切つて山へ行く決心をした。それでは簡単な所と悪い、谷川の一の倉を選んだ。エボン岩奥壁だつたらフリークライミングの一年間のランクを余り気にする必要が無い様な気がしたからだつた。

岩登りを決心してY君を説いたら二つ返事で同意してくれた。Y君と一緒に

だつた僕は實業に登れるし、絶対的な安心感が生まれるので。とうとう山行の日が来た。例の谷川列車に乗ろうと大宮へ行くと、すでに列車はホームから離れたあとだつた。僕の時間の見間違いだつた。このことに改札口で気付いたが、もうすでにどの券だつた。これはY君に悪いことをしたなと思ひながら我宿へ帰るためにホームへ足を向けた。今日は飲み過ぎで頭痛がする若客へ帰つて横になろう。山は避けやしない、またそのうちに行けるだろう。時間と間違い不幸中の幸いだな等々、一人で思いながらホームへ行くと、ピックリ、Y君達が僕を待つていてくれたのだった。僕はこの時Y君達の行動に頭が下がつてしまつた。普通列車はもう無いのにもかかわらず僕を待つてくれたのだ。自分は這いつくはつても谷川岳へ行かな

ければならないのだ。この時かつい決心した。それから時刻表を見て急行列車に乗り谷川列車を追つた。

私は列車に乗りなりバタンキューと横になつた。どうして朝まで酔さまさねはならないのだ、だが皮肉にも土合に着いてもまだ吐気がして頭痛がなぶらないのだ。後悔しても仕方ないが、昨日の送別会にそれ気になつて飲み過ぎてしまつたのが、くやまつて仕方ない。だが一の倉沢出合までは行こうと階段を登り出した。半分を登らういう間に息が切れ喉がこりにりして来た。だがY君はスイスイと一段づつ駆はしながら登つて行く。私はどうどう追いついて行けなくなり、一段づつに切りかえどうにか登りきることができた。

改札口を出ると、いつもの習慣で仰いた空は真暗だつた。だがそんな空様を気にする余裕も無く、一の倉を目



指し足を前後に動かし続けた。

僕達の前を歩いている人は誰もいない、沢の音だけが、僕の重い頭にさわやかに響いて来る。気が付いてみると一の倉沢の雪渓の上を歩いていた。このこうになると空には星が輝き出している。だが数えられる位の数である。テールリッジに登り後ろを振り返ると出合付近から不タルでも飛んでいるのかなと思われる様な懐中電灯の行列が私達を追って来る。この調子で行けば今日は最初に自分達の目標するルートに取り付ける様なりで、頭はまだ重いがテルリッジを急いで。

凹状ルートの取付で、朝食の用意をしたが、私にはどうしてそこ飯が喉を通らず、Y君の持つて来た梨を無理に口の中へ押しこんだ。そのうち私達と同じルートに取付くパーティが来たので、登攀を開始することにした。

登攀開始六時二十五分、トップはY君に頼んだ。私はまだ頭痛があるのでY君と一緒にで行くことにした。私はまだ梨を食べていたが、サイルはスルくと出していく。私は全然確保ひどくないただ片手サイルを送り出しているだけで、残りの手では梨を食べている。

私の登る番が来た。今年始めての岩登りだ。トップが簡単に登って行ったのを見て、私は梨を右手に持ったまま登

りだした。ところがハンク下のトラバースが意外とショソパイのであせつてしまつた。

ニビッチ、ニビッチと続けるうち、もう完全なる岩のトリコになつてしまつた。今日はセカンドで終始するつもりが、いつの間にかトップを登つていて

登攀時間一時間五十分、この時間内はそつ何もかも怠い、自分が毎週のようにこの岩場へ来ている様な錯覚にかられた。帰り道にそつ我が天下、一の倉の岩壁を登つて来たんだという満足感から、ハイキングに来た人達の視線を背にうけ、土合へと足を運んだ。

テラス場、テラスを正面より人工とフリードで登り出す。テールリッジには人が多い、皆何處を登りに来たのだろうと思ひながら登る。石ヘトラバースで凹角に入る所が悪い、四苦八苦してようやく凹角に入る。凹角を直上して山の字ハンクへ、このルートのポイントである。ハマくーーながらアブミのかけ替えをくり返してフェースに着いた。フェースを右ヘトラバースギミに人工ヒフリード行くと液に出た。

ここが衝立岩壁段オニルートの終了点である。北坡を下降して、スラブをすべりおりる。

人がひとりの女性を愛するように、ぼくは山を愛する。だからこそ、休暇を待ち焦れるのだ。ぼくは今の生活が本当の生活ではないかのように、現在は待機にすぎず、あたかも聖人が天国に入る日を待つらがう生活しているような気持で暮しているのだ。

ジャン・コスト 著 「若きアルピニストの魂」 あり

訳 近藤 審・大森久雄

登山行

吉野 武

南アルプス縦走

北岳・茶臼岳

矢嶋 寛

七月二十八日 晴

未明、甲府着。タクシーで広河原に入る。登山カードを記入し、ハ本歯のコルを目指して大樟沢を登る。朝のうちに晴れていた空を雲が多くなり、バットレス沢を過ぎる頃は雲り空となり、バットレスには時々かスガかかり登攀パーティのコールが聞える。

ウイークティなので登山者の数は少ない。重荷のため歩みは「カメ」のよう、五分の休憩が十分にも二十分になってしまふ。ハ本歯のコルには予定時間より遅れて着き、涼風にあたり昼食をとる。

北岳への分岐にサックを置き、北岳を往復する。頂上は時々かスが去来し、眺めがきかない。日のねぐらである稜線小屋の墓地へ、疲れが出て、目の前に見えていたいのにはいっこなく近くならない。ここから見る農鳥岳は

には水場がなく、北岳小屋まで行くので往復一時間もかかってしまった。一人残し、たMが心配して途中までむかえに来た。ささやかな夕食を食べシユラフに入った。

広河原	5:00 5:45
候	8:45
バットレス沢	10:30 10:45
ハ本歯のコル	12:35 13:10
北岳分岐	14:05 14:15
北岳	14:50 15:00
稜線小屋	16:35

七月二十九日 晴のち曇

五時に起水。今日は熊の平までのんびりと移動を歩くつもりで出発し、間もなく时段着。これから熊の平へ行くには早すぎることないので、この

幕営地	5:20
ノ	9:05 9:40
農鳥岳	10:15 10:20
農鳥岳	11:05 11:30
農鳥岳	11:50 11:55
農鳥岳	13:30 13:40
峰の平	14:25 14:35
三熊	16:10

そびえ立つてゐる感じだ。今まで下った分だけ確実に登ることになる。西農鳥岳には十一時に着いたが農鳥岳はまだ先であり、いままで歩いた時間から見て、農鳥岳に行くには時間的にきついので引き返す。農鳥岳には、いつの日か行けるだろう。

今日も又、午後になるとたらかスが出でて来た。山梨県側はかスのため見えないが、反対側のこじから行く熊の平の小屋はよく見えている。感じとしては近そうである。間ノ岳を発つたのは十三時四十分。この時間でもう稜線を歩いている人は少なくなつて来た。十六時すぎに熊の平に着いたが、私達の着いたのが遅いのかテント場も狭いが付道の場所がない。下が湿つていて所にグランドシートを敷いてテントを張る。昨夜は水で苦労したが、今日の前は近くに水がサア〜く流れているので余裕をもつて炊事をすることができ

た、焼肉で一杯やつて豪華な夕食を食べる。

七月三十日 晴のち雨

今日も晴。やはりはれていると夏分
がよい。朝靄を踏んで樹林の中を行く
尾根に出、ときれときぞれの樹林の中を
歩き七時展望台に着く。

今日、これから歩く塩見田が遠くに見える。

北荒川岳への途中、いやらしいかレ
場を二ヶ所ほど通り、お花畠へ、名も
知らぬ花が咲きみだれ、山旅に色とり
を添える。塩見岳へのコースの右側は
スッパリと切れおう、深い谷になつて
おり、慎重に通過する。これで西でも降
ついたら通過困難な所だ。北荒川岳
から塩見岳は割合近くに見えたが單調
な登りで実際には三時間もかかった。
塩見岳にかかる頃には晴れていた空も
前日同様がスかかかり塩見岳についた
時にはホソリ／＼雨が降って来た。
今まで歩いて来たコースがガスの中に
浮いている。

七月三十一日 晴

今朝は気分の悪いことがあった。となりに張ってあつた英大ワンアル部が二時頃起きて濡れ木をバリノヽ燃やしていると思つたら石油ニビを燃せしめたらしいことである。(多日に石油を持ってきたので助かつたが)

昨夜は遅かっだし今日の行程は短いのでゆっくりと出発する。濡れたソヤソ等は乾いている。鳥鳴子岳に立ち今日まで歩いて来た山々、これから歩く山々を眺める。まだまだ先は長い。





小河内岳の下りで登山者が一人バテている。そして大日影山では十人位のパーティが黄色いポンチョを二枚敷いて休んでいる。高山裏についたら中の一人が盲腸のこと、無事であればよいが。(結局無事に助かった。)

今日はこれきりだ。久しぶりに休養ができる。テントを張り芝のよう草の上に腹はいになり、法大ワンダルのホインチャンを眺めながらワイスキーを飲み午後のひとときを過ごす。

幕営地	6:20	7:20	7:30	7:40	7:45	8:25	9:25	9:40	11:30	12:00	13:40
稜線											
鳥羽岳											
前小河内岳											
小河内岳											
太日影山											
高山裏幕営地											

八月一日 晴

今日も三〇〇〇メートルの山を越える。南アルプスはでかい。毎日五〇〇〇メートルの氷の登り降り、きびしい山だ。

荒川岳は朝のうちにいふこともあつたがやがしくはなかつた。計画では、寒流岳も登る予定であったが時間がかかりそうなので荒川岳の頂上で長く休んで荒川屋へ。

大型寺宇をすぎ赤石岳手前のピークで休んでいると、伊那方面からヘリコptaの爆音が聞こえ、だんだん近づいて来、大日影山に降り病人を運び去る赤石岳で旗入な荒川岳の眺めを窺い百間洞へと下る。下りは赤石岳の名のとおり大きな赤石がゴロゴロしており疲れの出てきた体には歩きづらい。赤石岳の中腹から見た百間干は短いように思えたが、実際に歩いてみると意外に長い。(バテてもいたが)

ようやく百間洞についた。幕営地は広くはないが水がサアサア流れおり快適であった。

幕営地	5:00	8:15	9:50	10:45	11:00	11:25	11:40	12:55	13:05	13:40	14:10	15:40	16:00	16:40
川														
荒川														
荒川														
小														
寺														
平														
岳														
赤														
百														
間														
幕営地														

八月二日 晴

今日も晴れたよ、サワヤカに。毎日晴天が続き気持のよい健走ができる。今日の出発は六時すぎとなつた。最初から大沢岳の登りで一時間強、ショックバナからシゴカレ日はパッタリ、その

後は登下降をくりかえし、光岳に十時

半着、写真をとったり、パンをかじつたりで一時間近く休憩。

聖岳を眺める。大きな山だ。近くに見えるが一度下って五百メートル位登らなければならぬ。うんざりするほどの登下降だが行かなければならない。

聖岳の頂上に着いた時には、今までのさへとも忘れ、心ゆくまで展望を楽しむ。苦あれは寒あり、まさにそのとおりだ。

聖岳の幕営地には、びっしりとテントが張ってあり、空いている場所は狭く、私達のテント（五人用）を張る場所を探すのに苦労した。

夕食には焼肉を作ったが、さすがに飽きたのか残った。

幕	大	中	子	兎	最	聖
地	岳	山	岳	岳	部	岳
營	沢	丸	兎	最	位	

八月三日 露天小雨

朝のうち晴間の見えた空もだんだん雲がくるりかぐまいて来た。稜線

にレンズで雲を見る。

稜線歩きは雲の中、今までと、一種

異なり感がある。空身で上河内岳を往復し、頭で何を見えないのだと歩くのみ。時々小雨が降ってくる。ライチヨウを数羽見かける。茶臼小屋への分岐についたのが九時過ぎ、ここではうまく言える。天気は悪くなりそうだ



に別れをつげ、あとは畠庭ダムへと下るのみ。

最初は調子よかつたが、だんだん腰がおかしくなってくる。多くののがいやになる。アレヤレ峰に着いたのが二時過ぎ。あとわずかな下りと思うとホッとすると同時に、これで縦走も終りかと思うと名残りおしい。

タクのつり橋は長く、水面からかなり高い。対岸に土地の人の車がありバス停まで走せてもらう。歩いたら終バスには間に合わなかつた。（途中で我々を抜いたパティは道野原さにてん）トを張つていた。

バスは途中の井川で十分程休憩し、三時間半がかつて静岡駅に着いた。Mは帰つたが、私とHは静岡から来てゐる研修生を呼び出し、市内見物をする。駅で寝るつもりだったが、彼が宿の手配をしてくれたので泊り、翌日「東名バス」で帰つた。

暮	營	地	5:30	5:30	5:30	5:30
稜	河	線	5:55	5:55	5:55	5:55
上	基	岳	05	05	05	05
茶	分	岐	40	40	40	40
横	山	岳	00	00	00	00
クソツコ	白	岳	05	05	05	05
アレヤレ	滝	岳	45	45	45	45
フリ	橋	橋	14:10	14:10	14:10	14:10
畠	駅	駅	14:45	14:45	14:45	14:45
静	静	駅	15:00	15:00	15:00	15:00

滝

谷

46年8月15日

細井 信幸
中村 傳明

クラック尾根

B沢のコルより急なB沢を下る。この下りはいやすがであった。クラック尾根末端から赤褐色のバンドをトラバースして尾根の脇を回りこんで取付に出る。Hトップにて大きな凹角を登る。四十歩いってD1に出る。ビレイしてNをむかえる。ニピッヂ目Nトップにてフェイスをトラバースしてリツジに出る。D2にてビレイ、三ヒッチ自クラックからリツジにて旧目鏡のコルへ下降してビレイする。ここでは三級の上ぐらいであろう。ここのから旧目鏡のコルまでコンティニアスでいく。旧目鏡のコルから左にトラバースしてフェイスのクラックにルートをとる。ここはB沢側にスッパリと切れていて高度感の出るところである。

D5にてビレイする。D5から通赤ヴァンケンクラックへ快適そうにクラックなのでヴァンケンをしてトップをさめるところから付けられた」と呼ばれているチムニー状のクラックと、その左侧のクラックを登るものと二通りある。ここで先行パーティの時間待ちをする先行パーティは苦しめられていて、一見みた目はやさしそうであるが、クラックの他にはホールド・スタンスはなく、クレードはV級である。

私が登って見た感じ、オボッシュンとフリクションのみの登攀であったが以外と簡単であった。登っている最中に「快適だらアー」と思わず言葉が出る始末。

D6からは凹角を登り、フェイスを三ピッヂぐらいでヒヨックリ北穂の頂上へ出た。頂上はハイカーで一杯で、Nトップで登りはじめる。ハイケンを忠実に追うテラスへチムニー上部にはチヨックストンがあるではないか!!) Hを向え中央稜であることを確信したものの、自分達の技術をタナヒキで自クラックからリツジにてD1にて上へじうも難しひきと見える始末。2ヒッチ、Hトップでフェイス、凹角と登り広いバンドへ、バンドをクロウローテ、上部にハーケンの運打されているフェイスに取付く。ホールド・スタンスとも細かいが快適なフェイスを直上する。5ピッヂ、ハーケンの運打されている傾斜の高い凹角に入る。ハ

ドーム中央稜

細井信幸 記

クラック尾根の登攀を終え、北穂の

1ケンをホールド、スタンスにして横
立に乗り越し、6ピックフェースを二
十本ぐらい登って終了矣。サイルをと
だつた。

キ、ドームの頭を踏んで滝谷の連続？
登攀も終了した。
北穂小屋へ登攀終了の報告を消ませ

て、二人で洞沢のベースに帰り着いた
時にはあたりは闇につつまれていた。

中村博明 記

朝日岳～白馬鑓ヶ岳

昭和四十六年八月一日～八月四日

メンバー 石川 譲朗
沈上 健次
永島 祥光

夕食を済ませ少々のワインを飲み
深い眠りについた。

は二人の登山者がいるだけで静けである。剣の眺めは素晴らしい。白馬も頭を見せてくれている。
雪岱岳へは行くのがイヤになるほど下ってしまった。雪岱岳に立ち今日は針岱直下の雪溪まで行くことにする。Iさんは雪岱岳への登り頑かうバテ気味で私より少し遅れてきた。

明日は白馬岳へ、しかし白馬岳へ行つてしまえばもう下山である。静かな夏山も今日で終りひと悲しき殘念である。

八月一日（晴）

昨日の疲れが少し残っており、夕日ヶ原まで少し疲れだ。朝日平で一時間ほど休憩、写真を撮ったり、シャーベットを食べたり怠い怠いのこととすらもの、まだこれからがあるかと思うようにして登るが私の足がついていかない。アリ平までやっとの思いで登った。朝日平へはこうていに行けないので、イアリ大雪渓で幕営する所とした。しかし行ってみると大雪渓とは名ばかりでごく小さなものがいた。堪え難い寒さを感じながら朝日岳への登りにかかり、頂上に

八月二日（晴）

昨日の疲れが少し残っており、夕日ヶ原まで少し疲れだ。朝日平で一時間ほど休憩、写真を撮ったり、シャーベットを食べたり怠い怠いのこととすらから人が多くなり、頂上はいづぱいでいる。剣、富士山、立山、槍、穂高など大パノラマである。しかし白馬鑓ヶ岳は下まく眼前にありイヤな気分である。途中、闇天パーティと会う。長い

縦走をして来たと見え皆疲れているようだ。しかし黙々と歩いて行く。私はその後姿を見守るだけだ。疲れたといつて休んでいる私は、同じ山を歩く看

八ヶ岳卒業山行

芥谷光人

として身が縮も思いがした。
鎌温泉は露天風呂で登山道がすぐ傍
にある。Iさんはさっそく投宿、私も
今までの疲れを癒すため湯に入る。女
性登山者はあらうのほうに向いて下つ
ていく。歌を唱つたり、今までのこと
を語したり結構楽しかった。

八月四日（晴）

キスリンクに詰め下山しよう。
先輩がゴソゴソ起き出す頃、山々は
本当の姿を見せ始めていた。

永島祥光
記

散歩も行かぬうちに背が二十センチ
メートルも高くなっている、春はこれ
だから困る。花よりタンゴだなんてと
んでもない。タンゴとラッセルに悩ま
された私達は、立湯山を過ぎた所で沉
殿を沃め込んだ。時間が空っていたので
さっそく雪洞の講習会を開講する
ことにした。それでも、一時間ぐらい
で二人が横になれるくらいの穴が掘れ
さっそく「ためし寝」をすることにし
た。少し窮屈であったが疲れていたの
か、そのまま眠りこけてしまい、五時
頃寒くて目を醒した。『寝室』を拡張
して、あらためて横になった。七時頃
までト先輩の体験的恋愛論を聞き、寝
ることになった……

いけない寝坊をした。いそいでトレーラーを追う。オニ岩峰取付で先行パーティを追い抜いた。アンサインして岩峰を乗り越し、雪被をオ一岩峰へ向う。いやらしいオ一岩峰のトラバースを過ぎ、急なルンゼを上昇するともう阿弥陀岳の頂上である。時計は十時五十分を示していた。今日はもう登らぬいことにしたので、頂上で日光浴をしながらゆっくり昼食をとった。

二ルまで慎重に下りて、五とは行看
小屋めがけてシリセードで下った。文
三郎の出合付近にサツクをテボして、
行看小屋までビールを貰いに行くこと
にした。とにかく暑かったのである。
アレッ、小屋が開いていない。しよう
がないからテクテク磁泉まで歩くこと
にした。乗越しからまたシリセードで
ある。もうシャツ一枚だ。磁泉の赤い
屋根、沢山のテントがとてもさめじだ
詞に来た!! ビールが売り切れだ。マ
ショウがないからコーラで我慢する。

とにいた。可愛いいい女の子を横目で見ながら、コーラの空罐につめた水を手ヨビナヨビセリハガラニ時間ぐらい日光浴をして、ホ地氷に戻るころには、もう日も沈みかけていた。昨日の雪洞でビショビショになりこりたので、雪洞はやめにして、ツエルトを登ることにした。



朝食をとり、身仕度をして出發する。文三郎の本通りで晨の具合が悪く凡て途中でキジを打つ天。旅團にいた。

北峰リツジに向ってトラバースをし雪壁を登りはじめる。アンサイレンス大きな岩を乗り越え、いやうい雪壁を燃へて、玄いテラスに着いた。サイルをほどいて、リツジミラーに進む頂上付近で用ひのためアンサインする。終了したのが九時三十分である。赤岳の頂上で軽く会話をとり、文三郎尾根のところまで降りていって、トラバースして先ほどアンサインした大きな岩を、ノーアイルで越えて、テラスから北峰リツジを咸って、ショルダーリツジを咸って、シヨルダーリツジに取付いた。十時四十五分である、1ピック目、撤一そうだ。時間がかかるとしている。「登ってこい」とかかる。取付いたが回音跡の左側に打つてあつたハーケンを抜いてしまったので、ホールドがない。手が冷たくてシビしてきたり。上からは雪がひつきりなしに落ちてくる。なんとかそこを抜け出すと、リツジ状の所から危な草付に到る。完全武装で裏たはずなのに柴木にて眠れなかつた。

がかかる。「そこはルートじやないですか」どうもヤーリツジ(右)からオニリツジへ入り込んだらしい。どうりでしょ、ばいと思つた。行き詰つてヤーリツジのほうへトラバースする。ガラガラ、突然大きな音がして「落しこる」声と同じに一ヵかえもある岩が落ちてきた。ソーッと一瞬血の気が引く。「だいじょうぶかし」声がかかるトラバースがすんで、ヤーリツジにみると状道の岩登攀となる。

終丁ギ一時四十五分である。いそいでNさんたちの待つてゐる、文三郎尾根の分歧まで戻つた。もう一人はK君だった。明日、南峰リツジを登ることになったので、NさんとK君は尾根通しに赤坂まで戻つた。もう一人はK君だった。Nさんは、久しぶりにおいしい物が食べられるなあと喜んだ。Nさん達が戻って来たので、一緒に文三郎をベースに向って下つた。人数に加えてアルコールも加つたので、不変顔でかな晩となつた。

外は雨らしい。明日は登らずに帰るかも知れないが、卒業にふさわしいバラエティに豊富な山行だつたなあと横になりました。

九月の前穂

(北壁からA壁)

吉田 輝一

五時半、奥又白の池天幕を出發する。見上けると前穂東壁や凹峰正面壁は朝日に輝いて、薄いオレンジ色になつて聳え立つてゐる。素晴らしい光景だ。この様を眺めているだけでも池まで登つて来た個體があつたのに、そのオレンジ色に輝いている東壁を僕達は登りに行こうとしているのだ。岩場に向う時は、いつもそうであるように軽い興奮を覚えるから、B沢に続くガラ場を行く。B沢の入口付近には小さな雪渓があり、その上端から駆け下りてB沢に入る、B沢の中程にある洞窟は、細かいホールドを使って登るので丁度よいトレーニングとなる。この辺でオタオタしているようなら迷路石をして池に迷つた方がよさそうだ。テントを早く出たつおりでいたが、すでに右岩壁に取り付いているパーティがいて落石を避けたため沢の途中からインセルの上部へと出る。出た所からリッジ状の草

付を登ると比較的安定したテラスへ出た。ここは三・四のコルから下つて来る。前どの谷流奥でC沢の上部にあたる右上にはゴツコツした三峰リッジが今にも崩れそうな感じで立つてゐる。テラスで小休止する。振り返つて四峰に向つて登つてゐるのが見える。僕達も遅くなるといけないので、火をつけて間もない煙草を採み消して穴を急ぐことにした。

テラスから左ヘトラバースーでB沢に入り、B沢上部のスラブを石を落とさないように気を配りながらD壁の基部を覚えながら、B沢に続くガラ場を行く。D沢の入口付近には小さな雪渓があり、その上端から駆け下りてD沢に入る、D沢の中程にある洞窟は、細かいホールドを使って登るので丁度よいトレーニングとなる。この辺でオタオタしているようなら迷路石をして池に迷つた方がよさそうだ。テントを早く出たつおりでいたが、すでに右岩壁に取り付いているパーティがいて落石を避けたため沢の途中からインセルの上部へと出る。出た所からリッジ状の草

セットしらがラ・何処を登るのだろうかと盛んに目でルートを追つてゐる。「そんなに心配しないでいい。一ピックが終れば落ち着くよ」と云つて僕はサイルを両手にかかえて松高カミンルートを登るべく北壁の中央部へと立ちトラバースしてしまつた。少し酷のようであるからである。北壁だけで四十米三ロック離一いルートではないが陽が当らないので快適な登攀という訳にはいかない。一ピック目を登り出す時に三・四のコルから突如「ケイリー」のコール。屏風から連続して来たY氏とH氏だ。こちらからもコールを送る。H氏は可成バテているようだ。一時間程で第二テラスへ出た。テラスの基部はバンド状のテラスになつていて、真上はD壁のハンク帯が萩い被さっている。奥又の姿がよく見える。そして蝶ヶ岳、常念、白く曲がつてゐる横川も、A壁は、石ルートを登る。早速二ピックだ。一ピック目のハンク下のトラバースは、手の切れそうなクリップホールドを使つてこの場である。早速便達もサックの手から登攀具を引張り出して準備を始める。パートナーのNはソワソワとしている。パーティのNはソワソワとしている。一方は北壁へ、もう一方はD壁へとの事である。早速便達もサックの手から登攀具を引張り出して準備を始める。パートナーのNはソワソワとしている。彼女は久々振りの岩登りなので緊張しきる。落石を掛けても満足に返事をしない。彼女は久々振りの岩登りなので緊張しているふうだ。セルフスト・サイルを

セットしらがラ・何処を登るのだろうかと盛んに目でルートを追つてゐる。「そんなに心配しないでいい。一ピックが終れば落ち着くよ」と云つて僕はサイルを両手にかかえて松高カミンルートを登るべく北壁の中央部へと立ちトラバースしてしまつた。少し酷のようであるからである。北壁だけで四十米三ロック離一いルートではないが陽が当らないので快適な登攀という訳にはいかない。一ピック目を登り出す時に三・四のコルから突如「ケイリー」のコール。屏風から連続して来たY氏とH氏だ。こちらからもコールを送る。H氏は可成バテているようだ。一時間程で第二テラスへ出た。テラスの基部はバンド状のテラスになつていて、真上はD壁のハンク帯が萩い被さっている。奥又の姿がよく見える。そして蝶ヶ岳、常念、白く曲がつてゐる横川も、A壁は、石ルートを登る。早速二ピックだ。一ピック目のハンク下のトラバースは、手の切れそうなクリップホールドを使つてこの場である。早速便達もサックの手から登攀具を引張り出して準備を始める。パートナーのNはソワソワとしている。一方は北壁へ、もう一方はD壁へとの事である。早速便達もサックの手から登攀具を引張り出して準備を始める。パートナーのNはソワソワとしている。彼女は久々振りの岩登りなので緊張しているふうだ。セルフスト・サイルを

昭和46年度会員山行一覧

(会)とあるは 合同山行

				月 日	名	参 加 者
30	29	23	9	4・4・5	南会津 二股山	
叶山	谷川岳	丹沢	公川連峰	11	古賀志山	
北面	一ノ倉沢	モミン沢	朝日連峰 (ミオモテ) 穂高直下)	18	日和田山 (新人歓迎山行)	
				5・1・4	鹿島槍ヶ岳	
					扇沢 → 鹿島槍ヶ岳	
					東尾根	
					天狗尾根	
					(春合宿)	
					吉野	吉野 中村 南山田 斎藤忠
					山県	山県
					石川	吉田 水田 吉野 天嶋
					黒田	黒田 南 斎藤
					須藤	須藤 鈴木 組井 斎藤
					中田	中田 南
					渋谷	渋谷 石川
					石川	石川
					山崎	山崎
					鈴木	鈴木
					組井	組井
					斎藤	斎藤
					中村	中村
					山田	山田
					斎藤	斎藤
牧野	吉田夫婦	牧野	矢嶋	渋谷	吉田	吉田
中村		中村	渋谷	吉田	吉田	吉田
南		松本	吉田	吉田	吉田	吉田

27 28	22	16 19	15 17	14 16	穂高岳 仙丈岳 ～甲斐駒ヶ岳	朝日岳 ～白馬岳 (夏合宿)	劍岳 ～穂高岳 (夏合宿)	28 ～83	28
甲子山	叶山	苗場山							
南沢									
山県	中村	吉野	南	吉田	中村	細井	吉田	須藤	吉田
								池上	中島

							8・29	谷川岳 一の倉沢 凹状ルート	吉野 木田
10 3	24 5 26	24 5 25	"	23 5 26	19	"	マチガ沢(会)	コップアグニ雪表ルート 鳥帽子 中央カンテ	吉田キ 中村
谷川岳 衛立正面 雪被ルート	後立山 八方尾根	白峰三山		穂高岳 奥又池く B沢 ロフェース 東壁 Aフェース石ルート	ミカクラ山		穂高岳 屏風岩 はうしょうルート～北尾根・四峰 正面～右岩稜はうしょうルート	吉野 細井	木田 中田 中村 須藤 山田 松本 吉田テ 吉田セ 永島
吉野 木田	吉野 木田	須藤 吉田セ		中村 南	山県		吉田夫妻	中村 和井	吉野 木田

10	10	10	10	10	10	10	10	10
13	13	13	13	13	13	13	13	13
14	14	14	14	14	14	14	14	14
28								
21	21	21	21	21	21	21	21	21
5	5	5	5	5	5	5	5	5
22	22	22	22	22	22	22	22	22
宮士山								
(会)								
平標山								
→	→	→	→	→	→	→	→	→
三國峰								
石川								
牧野								
中村								
須藤								
吉田								
テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ
紫谷								
山県								
吉田								
キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ
中村								
矢島								
吉田								
ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ
中郡								
南	南	南	南	南	南	南	南	南
吉田								
キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ
中村								
池上								
細井								
須藤								
永島								
清谷								
山県								
中田								
吉野								
吉田								
キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ
中村								
岡部								
南	南	南	南	南	南	南	南	南
会員二十名								
一般六三名								

人多者十人，少者五人，以次第行。

人多者十人，少者五人，以次第行。其人多者十人，少者五人，以次第行。

人多者十人，少者五人，以次第行。其人多者十人，少者五人，以次第行。

人多者十人，少者五人，以次第行。

人多者十人，少者五人，以次第行。

人多者十人，少者五人，以次第行。

人多者十人，少者五人，以次第行。

人多者十人，少者五人，以次第行。

人多者十人，少者五人，以次第行。

人多者十人，少者五人，以次第行。

集解

た わ ご と ?!

人の意識というのはかわりやすいもので、二十号を発行して会員諸兄の喜ぶ顔を見たうすぐには二十一号の発行をと思って編集にとりかかったものの結局、丸一年以上たってから二十一号の日の日を見ることができた。この間の事情は、みなさんの想像におまかせする。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

会報がはたす役割りは、非常に大きなものであるはずなのに、会員諸兄は一向に原稿を書いてくれない。巻頭言にモ書いてあるが、文才なんか関係ないのに、いくら依頼をしてもとぼけられてしまう。この二十一号の遅れた大きな原因もそこにある。

それと、私自身おつぱりだしてしまったこと、これ等がかざなつて遅れてしまつた。

ようやくできあがつたものの二十号と比較して、何等進歩を見ることがでさるかたことを深くお詫び申しあげ

る。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

最近、私自身の山への接し方が変ってきたようになると、たゞ会に入つて日も浅い私がこんなにも早く交ることは、私自身想像していたよりも大きく違つてることに驚いている。

七月にヨーロッパへ行つた私の友人が、送別会の時、「まだ山へ行つてゐるとは思ひなかつたな」としみじみ話した。私自身この言葉を聞いた時、キッ

こしたが、「でも斐、たよ」と語った。たらそれを「交人だ」といつていた。そんな彼は、始約者を残してヨーロッパアルプスへの登山に出掛けて行つた。彼の長年の夢だったのだ。

ヒマラヤ行の話を出ていた会で、現在では会山行も教える人しか参加しない。各人が精神的に協力するよう、またできるような体制を早急に整えるくては、各人の協力と努力を望む次第である。

中村

溪 橋 第 21 号

発 行 日

昭和 48 年 9 月 30 日

発 行 所

浦和溪橋山岳会

浦和市領家 1-1-5

山縣昌彦

電話 (86) 8206

発行責任者

会長 山縣昌彦

編集・印刷

中村博明

